



Kouichi Takamori/Kaz Photography



夢の片道切符

異色の社長・恩田聖敬が
不退転の決意で挑むFC岐阜改革

生涯FC岐阜の社長でいるために——。
今年4月、不退転の決意をもってFC岐阜の社長に就任した恩田聖敬。サッカーについてはまったくの素人だった岐阜出身の若き経営者は、オール岐阜体制を作るべく精力的に活動している。就任から約半年、彼の眼にクラブとそれを取り巻く環境はどのように映っているのか？ 地域とともに歩み始めた新生FC岐阜の胎動を確かめに行った。

文・写真 ミカシカント Kama MIKAMI
写真 Kazuhito Yamada/Kaz Photography
Kouichi Takamori/Kaz Photography

宇宙工学からレジャー産業 そしてFC岐阜への片道切符

Jトラストという在京総合金融グループ会社の経営戦略部長から、FC岐阜というまったく畑違いのJクラブ社長に就任した異色の人物に話を聞きに行った。

恩田聖敬はFC岐阜の社長に就任するまで、ただの一度もスタジアムでサッカー観戦をしたことがない。年齢はJ1・J2の中で最年少の36歳（4月24日の就任時は35歳）という若さ。J3のブラウブリッツ秋田にもっと若い社長がいるとはいえ、選手としてならまだ現役でもおかしくない年齢だ。一般企業、特にIT系の企業などでは36歳の経営者というのは特段珍しくもないのだが、それがFC岐阜の経営者というのなら話は少々違ってくる。

FC岐阜は長らく財政危機から抜け出せず、チームも降格の危機にあったクラブで、存続が危ぶまれたことすらある。そんなFC岐阜に突然ホワイต์ナイトのように現れたのが岐阜市出身の在京実業家・Jトラストの藤澤信義社長だった。藤澤は自身の出身地というだけの理由からFC岐阜に1億5千万円もの大金を個人として拠出し（2012年末）、2013シーズンにも補強費として自身の財布の口を開

いたばかりか、2014シーズンには個人としてFC岐阜の筆頭株主となり、Jトラストグループとしても試合ユニフォームの背中スポンサーを買って出た。そして切り札として出したカードが恩田聖敬だった。

い。行ってみて恩田は驚いた。入場口でのチケットもぎりのお姉さんからしてすでに満面の笑顔を絶やさず、目につく従業員すべてがプロフェッショナルだと感じた。そしてパレードの終了後に目にした光景。「お客さんは入場料と合わせて大体一万円くらい使っている上にパレードのために一時間ほど並んで観ているわけです。なのにパレードが終わるとみんな笑顔で『ありがとう』という気持ちになって満足して帰っていきます。『なんだこれは！』と結構な衝撃でした」。その経験から恩田は「形には何も残らないかもしれないけど、みんなが『ありがとう』という気持ちになるサービス業に興味湧き、そういう仕事に就きたい」と思いはじめて、結局は宇宙工学とまったく関係のないアミューズメント・レジャー産業であるネクストジャパンに就職する。その会社は後に藤澤信義率いるJトラストの完全子会社となり、そこで藤澤と出会うのだから人生はわからない。ネクストジャパンがアミューズメント企業のアドアーズと業務・資本提携を行った関係からアドアーズの取締役管理本部長となった恩田は会社の基幹業務を一年でマスターすると、翌年は常務取締役としてゲームセンターの全店舗を回った。基本的に現場が好きなのだ。その一年後にはJトラ

恩田は岐阜の地に2000年続く家系の二男として岐阜県山県市で生まれ育った生粋の岐阜人である。聖敬という珍しい名前は父親が論語から引用してつけた名前だ。

地元の小・中・高校を出た恩田は京都大学に進学する。物理工学科に在籍しながら合唱団の指揮者にハマリ「いくつか音楽で飯が食いたいと思った」こともあるくらいのめりこんで、そのために勉強がおろそかになって一年留年している。しかし、せっかく京大に入ったのに勉強しないのはもったいないと思ひ直し、そのまま大学院に進んで宇宙工学の研究生活に入ったが、PC相手の研究生活は肌に合わずつらかったと漏らす。そうこうしているうちに思わぬところで転機を迎えた。就職を考えなければならなくなった頃、当時から交際していた現在の奥さんとオーブンしたばかりのデイズニーシーを訪れた。恩田自身はデイズニーに特別に興味はなかったが、愛する彼女のたつての願いとあらば断わるわけにはいかな



夢の片道切符

異色の社長・恩田聖敬が不退転の決意で挑む FC 岐阜改革

「FC岐阜を応援する県民有志の会」が、カチタカプロジェクトを通じて積極的にクラブの活動に関与をはじめている（カチタカは「FC岐阜の価値を高めるプロジェクト」の通称。活動内容に関しては同名で検索すれば公開したばかりのオフィシャルサイトがヒットする）。取材当日も有志の会から尾

一ノ岐卓（オレンターノⅡ）「俺んたあの」は「俺たちの」の方言）は株主である岐阜車体工業の会長・星野鉄夫を後援会長に戴き、同じく事務局長として村井勝美、事務局次長として井上謙二、副事務局長として郷健史の三名を出向させて今年三月から新たに体制を強化している。今シーズンの会員目標数を個人5000口、法人500口と掲げてスタートしたのだが、10月時点ですでに個人で5184口、法人で562口と目標数を上回る数字をはじき出している。

岐阜商工会議所の事務局長・河尻満は言う。「後援会長の星野さんは一所懸命やっておられますよ。岐阜県は地理的にひとつにまとめるのはなかなか難しい土地柄なのですが、星野さんがそれぞれの行政・企業などに積極的に働きかけてそれこそオール岐阜でFC岐阜を支援しようという体制づくりを進めていらつしやいます」。

また、サポーターも昨年末に組織した

「FC岐阜を応援する県民有志の会」が、カチタカプロジェクトを通じて積極的にクラブの活動に関与をはじめている（カチタカは「FC岐阜の価値を高めるプロジェクト」の通称。活動内容に関しては同名で検索すれば公開したばかりのオフィシャルサイトがヒットする）。取材当日も有志の会から尾

関泰史・湯浅裕作という県民サポーター二名が「ぎふJ1チャレンジ！」（後述）に関する打ち合わせに訪れ、練習環境改善を訴えるための署名活動について実務的な話し合いを行っていた。さらに県庁におけるFC岐阜の窓口はそれまでの商工労働部から今年4月に設置されたスポーツ推進課に移管されている。それと同時に、教育委員会が策定した10年がかりのスポーツ振興計画も同課に委譲され来年以降も継続される予定だ。FC岐阜にとっては新たな関係づくりとともに、これから行っていくであろう新しいさまざまな施策を遂行していく上で大きなチャンスを得ているといえる。クラブオフィシャルサイト内にある後援会のページに書いてあるように、県民・企業・行政が三位一体となった組織づくりを県内全域で一歩ずつ着実に進めている印象を強く受ける。

——観客増となっている大きな要因は何だと考えていますか？

「それはまず監督や著名な選手のおかげでしょう。たくさんメディアが取り上げてくれるようになってクラブの発信力が大きくなりました。我々は空中戦・地上戦と言っているのですが、空中戦というのはテレビや新聞などのメディア露出、地上戦というのはイベントを打ったりですとかクラブのホー

ムページなどで仕掛ける自社製のもの、あるいは足で稼ぐ営業などのことです。そういうところにさほど費用をかけずにできているというのが大きいですね。もう一点はサッカークラブという前提を取り外したことで思っています。今年行っているさまざまな催しはスタッフがみんな考えているのですが、自分の子供を連れて行きたくなるような発想でスタートさせています。ライバルは名古屋グランパスだと思っています。海や山がライバルだと思っ

「それが意外と出たんですよ。おそろくスタッフみんな思っていることはたくさんあって、だけど自分の部署や役割をこなすので精一杯だったんだと思います。ところが部署の枠を取り外したら、みんな私より長くクラブにいる人たちですというのが出てきました。最初はせいぜい次の試合をどうす



1試合平均入場者数は10月7日時点で7613人と昨シーズンに比べて2倍近く増えている。

ト本体に呼び戻され経営戦略部長としての業務を遂行していたのだが、今年の1月、藤澤からFC岐阜の社長をやってみないかと声がかかった。恩田は即座に「すごく興味があります」と答えて、2月のはじめには早速クラブ事務所に一週間ほど出張扱いで出勤してみたのだが、そのわずか一週間で「こりゃ確かにただ事ではないな」とクラブが置かれている惨状を理解した。それでもスタジアムに足を踏み入れた瞬間、緑に輝くピッチを目の当たりにして気持ちは固まった。「二週間に一度のホームゲームで一万人もの人に『ありがとう』と言ってももらえるかもしれない仕事ってそうそうないな」と。一週間の出張を終えると東京に戻り、藤澤に「FC岐阜に行かせてください」と伝え、恩田の新しい人生がはじまった。はたしてFC岐阜は恩田の願いどおりたくさんの人に「ありがとう」と言われる存在になれるのだろうか？

ライバルは名古屋ではなく遊園地や海や山

——社長就任時にやるべきミッションとしてふたつのことを挙げました。ひとつは集客のこと。もうひとつは知名度アップ。まだシーズンは終わっていませんが、これらに関してはある程度納得のいく数字となっているのではな

いのですか？

「そうですね、集客に関してはおかげさまで現在のところ昨年の1.7倍（昨シーズンの1試合平均入場者数は4525人。今シーズンは10月7日現在で7613人）という数字になっていますが、当初2倍という数字を掲げたこともあり、そこまでは至っていないということ、もう一歩二歩前に進めたら嬉しいなというのはあります。でも県民の皆様が反応してくださった結果として来年につながる数字にはなっているのかなとも思いますね。一方、知名度アップという点では、トップチームのラモス監督や川口選手などに負うところが大きく、私の手腕と関係のない部分がほとんどです。ただ、トップ以外のアカデミーですとかホームタウン活動ですとかスクール活動、このあたりはまだ知ってもらえる余地がたくさんあると思っています。いま岐阜県内の42市町村すべてを表敬訪問している最中です（県内の42市町村すべてがFC岐阜の株主である）」

岐阜は地勢によって大きく5つの地域に分けられるが、それぞれの熱は昨年よりずいぶん上がっている」と地元経済界は見ている。その辺については恩田のフットワークの軽さもさることながら、後援会組織である「オレンターノ岐阜」の存在も大きい。オレンタ



Kazuhiro Yamada/Kaz Photography



夢の片道切符

異色の社長・恩田聖敬が不退転の決意で挑む FC 岐阜改革

サッカーを知らないＪクラブ経営者のことが私の周囲でも時折話題となることがある。サッカークラブなのだから経営者としてサッカーのことに精通しているのが望ましいのは当然のことだ。しかし、サッカーに精通している経営を知らない人間と、経営者としての資質はあるがサッカーは知らないという人間を社長として比較した場合、私は圧倒的に後者の方が有利だと思う。なぜなら、有能な経営者というのは身近にサッカーに精通した人間を置くものだと思うから。恩田はサッカーを知らない。ならば、恩田の考えを理解できるサッカーに詳しい人間をそばに置

っているのだろうか。「第一印象としては大変率直で誠実な方だと好印象を持ちましたね。それからはお互いに近況を報告しあって、現状どんな課題があるのかといったことや、どういうクラブを作っていきたいのかというところで意見交換をしてきました。Ｊクラブの素晴らしいところはサポーターが応援をする時に、期せずして地域の名前を連呼するところです。そうやってサポーターが地域名を呼び続けることで地域に愛着が湧くことにつながると思うので大変いいことだと考えています」。こうして恩田はＦＣ岐阜と自身の理解者を増やしていつている。

けばいい。問題はそういう人材を恩田が見つけられるかどうかだ。ただ、現場とフロントの関係というのは世界中のどのクラブにとっても難しい問題であることには違いない。サポーターがクラブの社長に盛大なブライニングを浴びせる光景をこれまで何度か他クラブのスタジアムで目撃してきた。しかし、今年のＦＣ岐阜でそんなことは露ほども考えられない。「去年と今年ではスタッフの雰囲気が違う。お客さんに笑顔で接するスタッフが増えた」と教えてくれたサポーターがいるが、それはサポーターも同じで、今年の彼らは誰もが楽しそうだ。いつの



Kouichi Takamori/Kaz Photography

恩田聖敬

おんだ・さとし

1978年5月10日生まれ、岐阜県山県市(旧高富町)出身。岐阜県立岐阜北高等学校、京都大学工学部物理工学科を卒業し、京都大学工学研究科航空宇宙工学専攻を修了。2004年ネクストジャパン入社、2011年にアドアーズの取締役管理本部長、翌年に常務取締役に就任し、2013年にＪトラスト経営戦略部長を経て、2014年4月FC 岐阜代表取締役社長。



就任1年目のラモス瑠偉監督。彼の知名度によってクラブの存在が広く浸透し、集客増につながっている。

正直に言ってしまうのは強化責任者の松永(英機)さんに任せっきりという状態でした。そこを来シーズン以降はちゃんと見ていかなければいけないなとは思っています」

——次にホームタウン活動についてです。ＦＣ岐阜はＪクラブ屈指の活動回数を誇っていましたが、今年は選手が参加する回数が減っているという印象を受けています。同じことを言っているサポーターもいました。実際のところはどのくらいでしょうか？

「いえ、そんなことはないと思いますよ。今月も毎週末には選手がどこかに行っていますし」

後で調べてもらったところ、確かに減っているという印象は間違いない。選手が参加するホームタウン活動回数は昨年が36回(クラブ全体では362回)で、今年は10月23日現在までで38回(同360回)を数えていた。

——最後にうかがいます。ＦＣ岐阜の今シーズンにおけるリーグトップの集客増というのはラモス監督の知名度によるところが大きいというのは先ほど恩田社長も認めたところです。ですが、監督というのはほとんどの場合、いずれは去っていくものです。アフターラモス、ということは心配されませんか？

「やはりその時には大きなクレバスが

できると思いますので、それにクラブが耐えられるかどうかというのは本音としてありますね。だからこそうラモス監督や川口選手以外のＦＣ岐阜の魅力は何なのかという部分を考えて地道に伝えていかなければと思っています。チームに関してはいえばそのひとつが岐阜県出身の選手で、幸い今シーズンはＦＣ岐阜ＳＥＣＯＮＤ出身の選手も含めて4名の岐阜県出身選手が毎試合のようにベンチ入りを果たしていますし、日本代表に選ばれるくらいのスターとなる選手を育てていきたいと思っています。それには当然アカデミーの存在も重要です。未来につながるラインをどう醸成していくかということですね」

10月8日、ＦＣ岐阜は岐阜県を中心に東海三県で採用就職支援を行っているＮＰＯ団体のＧｉｎｅｔと事業協定を結び、来年3月までの期間で二名の学生をインターンシップとして採用することを発表した。今後、ＦＣ岐阜における学生募集や学生の研修プログラムをＧｉｎｅｔが無償で提供することになる。Ｇｉｎｅｔ代表の秋元祥治は恩田と1歳違いの同年代で、生まれ故郷の岐阜を人材面から活気づけたいという思いからＧｉｎｅｔを発足させた岐阜の若手キーパーソンのひとりである。彼の眼にＦＣ岐阜や恩田はどう映

日にか恩田が指揮者として、スタンドにつめかけたサポーターの前でタクトを振り、チャントや岐阜県民の歌をスタジアムに響かせる日が来るのではないかと夢想するとても愉快な気持ちになる。(文中敬称略)